

山形県での里山保育の普及に向けた 保育者養成の取組（１）

下村 一彦*・村上 智子*・佐東 治**

本研究の目的は、里山保育の普及に向けた保育者養成の向上にあり、本稿では、山形県内の里山保育の現状を明らかにした上で、分園を開設して里山保育に取り組んでいる保育園の保護者の意識を把握するとともに、保育を記録した映像教材についてまとめている。まず、山形県の里山保育実施状況を把握するアンケート調査を通して、里地里山が散歩圏内にある園にあっても、継続的に里山保育に取り組んでいる園が多いとはいえないことや、未実施園でも、専門的指導者の確保が求められていることなどを明確にした。次に、平成24年度から分園を開設したはらっぱ保育園の保護者アンケートから、安全対策への不安が多いが、子どもの成長を実感することで園への総合的な評価は安定することを示した。最後に、知識がなければ里山保育ができないという消極的な認識を改められるようにとの観点で作成した、はらっぱ保育園の里山保育の映像教材（発展的木登り）の概要を整理した。

はじめに

近年、自然体験に関して、一般に効果として認識されている身体諸機能の調和的発達や探究心育成の他に、【表１】に

【表１：小４～小６・中２・高２の自分に対する意識(単位%)】

| 質問項目\自然体験 | 多い | 少ない |
|--------------------|------|------|
| 「勉強は得意な方だ」ととても思う | 17.9 | 3.3 |
| 「今の自分が好きだ」ととても思う | 26.7 | 6.1 |
| 「学校の友達が多い方だ」ととても思う | 60.2 | 25.8 |

示したように、自己肯定感やコミュニケーション能力の育成も期待できることが調査研究で示されている⁽¹⁾。我が国では幼児期の自然体験を対象とした大規模な調査は管見の限りないが、‘森のようちえん’が普及しているドイツでの森のようちえん卒園生の追跡調査による研究や、環境教育の‘森のムツレ教室’が普及しているスウェーデンでの都市部の保育園と野外活動の多い保育園の比較研究においても、同様の結果

* 東北文教大学

** 東北文教大学短期大学部

が示されている⁽²⁾。

しかし、このように自然体験が人格形成に有意義とされる一方で、我が国の児童の自然体験は減少傾向にあることから、何らかの対策、特に児童の関心や意識が形成される幼児期からの取組が求められる⁽³⁾。以上の認識から、本研究では里山保育（森のようちえん）に注目するのだが、全国各地で様々な実践が展開されている⁽⁴⁾。例えば、里山に分園を設けている木更津社会館保育園⁽⁵⁾、森のムッレ教室を行う日本野外生活推進協会に加盟している園⁽⁶⁾、森のようちえん全国ネットワークに加盟する各種団体⁽⁷⁾、自然環境を求めてビニールハウスの園舎で始まった札幌トモエ幼稚園⁽⁸⁾、週末宿泊型自然体験のキープ森の幼稚園⁽⁹⁾、各地の自主保育グループ⁽¹⁰⁾などがあり、書籍やHPを通して豊かな活動内容やその理念を知ることができる。

ところが、先に述べたように児童全体を見れば自然体験は減少傾向にあり、これらの園・団体の取組は十分に他の園に波及しているとはいえない。その原因として千葉県でのアンケート調査では、①場所の確保、②専門的指導者（安全確保や遊びのプログラム）の確保、③保護者の理解獲得、が主な課題として挙げられている⁽¹¹⁾。①場所の確保は、突き詰めていくと園（保育者）の意識が無関係ではないが、行政等の園外関係者の役割も大きい⁽¹²⁾。一方、②専門的指導者の確保は、園外の専門家を行政やNPO法人が派遣する取組もあるが、そもそも専門職である保育者の意識や能力の課題であり、③保護者理解の獲得も同様に、保育者の課題である⁽¹³⁾。本研究に取り組む3名が保育者養成校の教員であることから、本研究では②③の課題に焦点を絞り、保護者の気持ちにも寄り添いながら積極的に里山保育に取り組める保育者の養成を通して、里山保育の普及に寄与することを目的とする。まず本稿では、その第一段階として、山形県内の里山保育の現状を明らかにした上で、県内の里山保育実践園の保護者の意識を把握するとともに、里山保育の取組を映像教材化する。具体的な構成は以下の通りである。

第一章では、山形県内での里山保育実施状況を把握するために、県内全ての幼稚園・保育所を対象にしたアンケート調査の結果を整理し、普及に向けた課題を確認する。

第二章では、県内で唯一里山に分園を開設し、平成24年6月から日常的に里山保育に取り組んでいる、はらっぱ保育園（山形市）の取組を整理するとともに、保護者を対象にしたアンケート調査の結果から、保護者理解獲得に向けた留意点を確認する。

第三章では、はらっぱ保育園の里山保育の記録映像から作成した映像教材についてまとめる。里山保育の映像としては、木更津社会館保育園を記録した『里山っ子たち』（桜映画社、2008年）や、青空自主保育なかよし会を記録した『さあ のはらへいこう』（記録社、2011年）などがあり、生き生きとした子どもの様子や保育者の援助姿勢を視覚的に知ることができる。本研究で作成する教材は、それらに取って代わるものではなく、一つの活動を時間に囚われずに教材化することで、子どもの様子や保育者の姿勢への理解を深めることを意識している。

第一章 山形県内の里山保育の状況

山形県内での里山参加の実施状況を把握するために、平成25年1月31日に発送し、

同年３月末までの無記名返送を依頼する形で、県内の全ての幼稚園と認可保育所（認定子ども園を含む）の340園⁽¹⁴⁾にアンケート【文末の参考資料１参照】を実施した。

回答が得られたのは161園（回収率47.4%）であった。回収率の低さの一因として、里山保育の定義づけの困難さがある。本研究ではアンケート実施段階において、環境省HPの里地里山の定義「原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地、ため池、草原などで構成される地域」を用い、そこでの保育を里山保育と定義した。ただし、その時点から、‘集落と混在する農地、ため池、草原’の認識にバラつきが生じるとの判断があり、特に、地域住民や園職員が主に手入れした田畑での収穫体験は、意義は尊重するものの、里山保育とはいえないとの考えから、「‘収穫を主とする芋ほり’のような農地のみでの自然体験等は、里山保育に含めない」という説明を加えた⁽¹⁵⁾。しかし、アンケートを通して、田畑での継続的な活動をしている複数の園から指摘を頂く等、意図が十分に伝わらなかった。そこで、現在では補足説明を「継続的・定期的に自然環境を活用し、幼児の主体性を大切に行われる保育。（含まない例）少年自然の家などでのアスレチック遊具を主とする活動、‘芋ほり遠足’のように収穫‘だけ’を主とする’農地での活動」と修正しているが、以下の結果は修正前のものである。

まず、153園の里山保育実施頻度を【表２】にまとめた⁽¹⁶⁾。里山保育においては、四季の移ろい等を感じるためにも、同じ場所で継続的に取り組むことが重要であるが、実施せずを含めて3園に2園の割合で、4回以下の頻度であり、実施そのものに加えて継続性が十分に確保されているとはいえない。ただし、継続性は園の立地環境にも大きく左右されるので、実施頻度だけから論じることは適切ではない。そこで、散歩圏内に里地里山があるかという質問（‘ある’‘ない’ともに62園で、36園は無回答）と合わせて分析してみると、里地里山が散歩圏内にある62園の内、実施せず2園を含む26園が4回以下の実施に止まっており、環境があっても里山保育に取り組まない、十分に取り組んでいるとはいえない園が少なくない。

なお、【表３】に示したように、園周辺の散歩以外の形態で里山保育に取り組んでいる園は実施園の半数以上に及んでいるが、唯一、分園形態で実施している保育園の取組（第二章以降で取り上げる）は、立地環境に左右されずに継続性を確保できる形態として注目される⁽¹⁷⁾。

次に、【表２】にある、現在里山保育を実施していない44園の内、37園の次年度以降の里山保育実施意向をみても、実施を望んでいるのは4園（望まない8園、無回答25園）に過ぎない⁽¹⁸⁾。里山保育普及への厳しさを感じずにはいられないのだが、消極的・否定的になる背景として、この37

【表２：実施頻度】

| 回数 | 園数 |
|-------|----|
| 100以上 | 6 |
| 99～50 | 2 |
| 49～20 | 15 |
| 19～5 | 25 |
| 4～1 | 61 |
| 実施せず | 44 |

【表３：実施形態（単位：園）】

| | |
|-------------|----|
| 徒歩以外で県施設等利用 | 73 |
| 園周辺の散歩 | 69 |
| 提携園との交流 | 11 |
| 分園 | 1 |

【表４：実施条件（単位：園）】

| | |
|-----------|----|
| 場や移動手段の確保 | 21 |
| 保育者の意識や知識 | 13 |
| 専門的指導者の確保 | 13 |
| 保育者の増員 | 9 |
| 保護者理解 | 6 |

園が挙げる里山保育実施の条件を【表4】にまとめた（専門的指導者に求める指導内容としては、遊び方が9園、安全を含む知識が9園、応急処置が5園であった）。

里山保育の普及に向けた条件は、質問の選択肢設定において、はじめにで挙げた千葉県のアンケート結果を参考にしたこともあるが、千葉県同様、場所の確保、保育者の意識・能力の向上、保護者の理解獲得が挙げられており、里山保育の普及に向けた課題は概ね共通していると考えられる。

そこで、第二章では保護者理解、第三章では専門的指導者の確保等の課題に対する本研究の取組について述べる。なお、次章で取り上げる保護者理解に関しては、【表4】にあるように、他の課題と比べて課題とする園が少ないが、逆に、里山保育の実践園では、以下のような理由から対応が必要な課題と認識されており、保育者志望の学生に保護者の思いを伝えていくことの意義は小さくない。

○園が里山に抱かれる立地のM園（最上地方）

「自然が豊かな町にあっても、転入もあれば、地元出身だからこそ熊やハチを警戒しており、里山体験のある保護者は少ない」と園長が感じている⁽¹⁹⁾。

○里山の麓に立地のK園（庄内地方）

「近くに里山があっても経験の無い親世代が増えてきている」と園長が感じている⁽²⁰⁾。

○散歩圏内の寺社林や海岸で里山保育に取り組むS園（庄内地方）

連絡ノートを紹介して里山保育と屋内保育の希望制を採っているが、里山保育開始当初は、屋内希望が出た。また、現在では子どもの様子から、就園児の保護者からは屋内希望は出ないが、併設する子育て支援センターの利用者の中には、屋外に出たがらない保護者が少なからずいる⁽²¹⁾。

第二章 保護者の意識

第一節 はらっぱ保育園のこれまでの取組の特色

本章では、はらっぱ保育園（山形市）に協力を頂き、保護者の里山保育に対する意識を把握することで、保護者理解の獲得に必要な取組や留意点を学生に提示できるようにする。まず、保護者の意識を明確にするためにも、本節では、同保育園の保育の特色について整理する。

第一章の【表3】で挙げた県内で唯一、分園形態での里山保育を実施しているのが、はらっぱ保育園である。同保育園は、0～5歳まで各1クラス、定員90名の保育園で、大規模ショッピングセンターを中心とする新興住宅地にあるが、河原や神社の他、多数の都市型公園が徒歩圏内にある。「地域の人々との日常的な交流を深めながら、ヒトから人間への成長を育むくらしをつくりたい」、「子ども達をまんやかに、父母と職員は‘みんな我が子’という思いを大切に、暖かい大家族のようなくらしをつくりたい」という理念の下、幼児期の保育目標を「命を大切に子どもたち」と「感性豊かな子どもたち」とし、分園での里山保育に取り組む以前から以下のような特色ある保育を行っている。

（１）食育

加工品を一切使わない給食とおやつ（デザート的なものであることは少なく、焼きおにぎりや野菜など）を提供している⁽²²⁾。

（２）屋外活動の重視

滑り台やブランコ等の大型遊具のない園庭において、冬季以外は裸足で活動し、泥遊びを中心とした活動を行っている。また、雨でも雪でも園外に出て散歩をしているが、その距離や時間が一般の保育園と比べて長い。

（３）家庭的な雰囲気

園長が‘阿部の父ちゃん’を略して‘阿部父（あべとう）’と子ども・職員・保護者から呼ばれているように、職員全員を愛称で呼び合っている。子ども同士も呼び捨てが基本である。また、保育参観は行わず、保育参加を何時でも受け入れている他、運動会で５歳児の種目が、逆上がり・一本橋渡り・竹馬・竹登り等であるように、行事においても保護者に普段の様子を見せることを大切にしている。

（４）世代間交流

同一法人が運営する高齢者入所施設が隣接しており、特定の高齢者との交流（絵を描いてもらう、縫物をしてもらう等）の他、施設内を散歩することやホール・屋上で活動することで偶発的な交流もある。

（５）リズム運動

斎藤公子氏の「さくら・さくらんぼ保育」を参考に、定期的に専門家を招きながら実践している。朝の会での歌以外で殆どピアノを弾かない幼稚園・保育所が少なくない中で、悪天候時や散歩前、お迎えの待ち時間等、特定の保育士に限らず、クラスを問わず、ピアノを弾いて子どもと取り組む姿が見られる⁽²³⁾。

以上のような特色ある保育を行ってきたはらっぱ保育園は、平成24年６月から西藏王に分園を開設した⁽²⁴⁾。基本的に毎日、本園登園後に年中・年長児約30名（２歳児クラスと３歳児クラスも時折、交代で参加する）を園バスで分園まで送迎（約30分）する形で里山保育が行われている。

【写真A】分園正面



【写真B】冬の尻すべり



【写真C】秋の雑木林



【写真D】春の小川



【写真E】秋のススキ



【写真F】夏の斜面



【写真G】春の斜面登り



【写真H】春の棚田



分園の環境を簡単に紹介すると、【写真A】が分園の外観である。分園を背にして数十メートル進むと休耕地があり、その土手は【写真B】のように冬場の尻すべりポイントになっている。また、休耕地の周囲は、【写真C】にあるように低位で枝分かれした雑木林となっており、第三章で取り上げる木登りもそこで展開された。【写真D】は休耕地と雑木林を山頂方向に抜けたところにある小川だが、1メートルに満たない川幅は、飛び越えたいという幼児の挑戦心を発揮できる場である。また、川沿いでは、桑の実やアケビなど、食べられる木の実も採れる。小川に沿って進むと【写真E】にある空き地に出るのだが、秋にはススキが大人の背丈よりも高く群生するため、幼児には先が全く見通せない。そこを抜けると【写真F】のような見晴らしの良い斜面（登った所から撮影）があり、更に進むと放牧場や大山桜の名所がある。また、【写真D】の麓側には、【写真G】のような斜面に沿った農道があり、【写真H】の棚田へと続いているが、棚田には、アカハライモリ等、多くの生物が生息している。

以上のように、幼児だけでなく保育者の好奇心も刺激して止まない環境なのだが、平成25年度からは分園から500メートル程のところに畑を設け、無農薬野菜の栽培と収穫にも取り組んでいる。

第二節 里山保育に関する保護者アンケート

はらっぱ保育園の里山保育準備段階から園の協力を頂き、里山保育実施前の平成24年3月（年少・年中クラスの全保護者対象）と実施中の平成25年2月（年中・年長クラスの全保護者対象）の2回、保護者の意見を伺った⁽²⁵⁾。先行研究でも保護者の意見を得ることはできるが、それらは、幼稚園や自主保育グループ、里山保育に長く取り組んでいる保育所でのものであり、多くは当初から里山保育を望んでいた（知っていた）保護者の意見であるのに対して、はらっぱ保育園では平成24年度の年度途中に初めて計画が保護者に説明されたことから、里山保育を望んで子どもを就園させた保護者はいないため、より多様な立場の意見が得られる⁽²⁶⁾。

因みに、はらっぱ保育園での里山保育の知名度が大幅に高まらない限り、今後も里山保育を望んだ訳ではない入所が見込まれる⁽²⁷⁾。【表5】にはらっぱ保育園の保護者の入園動機を多い順に整理した。本章第一節で述べ、選択肢の項目に挙げているように、はらっぱ保育園は他の園で

【表5：入園動機（16人の複数回答）：単位（人）】

| | |
|--------------------|----|
| 理由は特に無く、家や職場から利用可能 | 10 |
| 食育 | 6 |
| 散歩を多く取り入れた保育 | 5 |
| 小規模で家庭的 | 4 |
| 併設の高齢者施設との交流 | 1 |
| リズム活動 | 1 |

はあまり見られない独創的な保育を行っているが、半数以上の保護者は保育内容に関係なく送迎の利便性で園を選んでいるからである。

以下では、アンケート結果を整理しながら、保護者理解を獲得する上で留意すべきことをまとめる。まず、事前アンケート【文末の参考資料２】は、担任を介して24名の保護者に配布し、無記名の郵送回収で16名（回収率67%）から回答を得た。

第一節で述べたような屋外活動を重視しているこれまでの保育への満足度が非常に高い（非常に満足と満足が14人、不満0人）中で、里山保育への意見はその満足度程前向きではない（大いに賛成と賛成が8人、大いに反対も2人）。里山

【表6：里山保育への不安：単位（人）複数回答】

| | |
|--------------------------|---|
| ハチ・ヘビ等の生き物による怪我 | 9 |
| 転落や転倒など子どもの行動による怪我 | 9 |
| 保育者の負担が増え、子どもに目が行き届かなくなる | 9 |
| バスによる分園への移動に送迎時間を合わせる | 7 |
| 原則毎日里山で活動することで、保育内容が偏る | 7 |
| 食事の搬送（食事ができなくてなくなる・いたみ等） | 4 |
| 放射能の里山環境への影響 | 3 |
| 衣服の汚れ等の保護者の負担増 | 1 |
| 里山の環境に子どもが馴染めるか | 0 |

保育に消極的な背景には、【表6】に示したように、安全性（生き物や行動による怪我）への不安が大きい。里山保育への賛否を保留した母親Aの「里山保育は、子供にとっていろんな自然の生き物などにふれるチャンスだと思うけど、急に具合が悪くなった時のむかえが遠いです。（以下、保護者のコメントは全て原文のまま）」という自由記述に象徴されるように、怪我そのものよりは、緊急時の対応や病院送迎に不安を感じているようである。里山保育に取り組むにあたっては、大きな怪我を回避する対策や緊急時の対応を事前に丁寧に説明することが不可欠であることが分かる。なお、はらっぱ保育園では、本園よりも立地が分園に近い同一法人の高齢者施設との緊急時の連携体制を保護者に説明することで、不安の解消に努めている。

また、安全への不安に次いで多かったのは、バスによる分園への移動に送迎時間を合わせることである。筆者は当初、この結果を保護者のサービス享受者意識と否定的に受け止めていた。義務教育の小学校以上であれば、始業・終業時間にこれ程の不満は出ないからである。しかし、1人の保護者から偶然、「これまで仕事の関係で7時に登園させていたので、子どもの疲れを考えたり、子どもとの時間を作りたいと16時に迎えに行っていたんですけど、迎えは17時以降にしないといけないんですね」という話を伺うことができた。8時前後からの利用が多い保育園にあって、早朝保育を利用している保護者のこの思いに触れたことで、筆者が保護者の不安や不満に真摯に向き合っていなかったことに気づかされた。サービス享受者の意識から時間への不安を選択している保護者がいるかもしれないし、上述の保護者の希望に沿う時間での運営は午睡とおやつ時間帯を考慮すると困難であるが、少なくとも、子どもにとって良いものだから保護者は理解すべきだという姿勢は、保護者理解の獲得に不可欠な共感する姿勢を欠いたものであることを筆者自身改めて認識し、学生にも伝えていく必要を感じた。

なお、食事の搬送に関しては、平成24年度から主食となった玄米が傷みやすいこと

もあり、分園での調理（おかずの下ごしらは本園）となっている。また、衣服の汚れを気にする保護者が1人しかいなかったことは、本園でも泥遊びが多く、乳児は布オムツで保育を行っており、既に洗濯の多さに慣れた保護者を対象にしたアンケートであったためと推測されることから、里山保育に対する一般的な保護者の認識とはいえない。

里山保育の普及（開始）期においては、上述のように保護者は多様な不安を抱いているが、他方で、里山保育に賛否を保留した母親Bが、「里山1期生のためただ心配なのではよね。わかってはいるのですが…。子供が楽しんで毎日様々な発見をして目を輝かして親に‘こんなことがあったよ’と報告してくれる日がくると安心を得られるのかな?」、また、里山保育にかなり反対を選択した母親Cが、不安を綴った後に「しかし、子どもが育てば結果オーライ。これからです。保育士がどれだけ理念を実践できるかも非常に育ちにかかわると思っています」と自由記述に記しているように、子どもの成長を実感することで不安や不満が解消できるとの認識も示されている。里山保育に対する期待として多く挙がっていた、自然環境に親しみ、動植物への愛情が豊かになること（12人）、物事に取り組む上での意欲・忍耐力の向上（9人）を実感できるように、保護者に保育の様子を伝えていくことが重要であるといえる。

次に、実施中のアンケート【文末の参考資料3】は、担任を介して26名の保護者に配布し、無記名の郵送回収で11名（回収率42.3%）から回答を得た。

アンケート実施時期に他県でのマダニによる死亡事故報道があったことも影響しているかもしれないが、【表7】にあるように、マダニやブヨに刺されての病院受診が実際に発生した中で、生き物による怪我への不安が多いまま（回収数が減っているのに事前も実施中も9名）である。また、送迎に関する不安は、事前の7/16から3/11へ減少しているとはいえ、「山からもどってくるのが少し遅いように思いました。早めのおむかえに行きたい時でも結局17時すぎになってしまいます」という自由記述での不満や、実際に家族が分園まで送迎した経験のある2名の内、1名が【表7】にあるようにそのことを不満に感じている。さらに、県内での熊目撃件数の増加や平成24年度の大雪は、多くの保護者が不安を感じる要因となったようである。

【表7：不満に感じたこと：単位（人）】

| | |
|------------------------------------|---|
| マダニ等の生き物による怪我（及び、それへの対応） | 3 |
| 転落や転倒など子どもの行動による怪我（及び、それへの対応） | 1 |
| バスによる分園への移動に送迎時間を合わせられず、保護者が送迎したこと | 1 |
| 衣服の汚れ等、洗い物が増えたこと | 0 |

しかし、総合評価で不満を選択する保護者はいない（非常に満足1人、満足6人、どちらでもない4人）。少し詳しく見ても、生き物による怪我に不満を感じた3人の保護者も、総合評価は満足2人、どちらでもない1人であり、分園まで送迎した2人も、総合評価はともに満足である。この背景には、子どもの様子を保護者が肯定的に受け止めていることがある。具体的には、子どもが里山保育を楽しみに思っている（非常に楽しみと楽しみが8人、どちらでもない3人、嫌がっているは0人）と保護者が感じ、実施前の期待として最多だった自然への関心育成が、効果として感じたこ

とでも最も挙がっている（８人）。

以上のことから、怪我等のトラブルがあっても、また時に保護者に送迎負担が掛かっても、病院受診を含めた適切な対応

をすること（はらっぱ保育園では、マダニとブヨの怪我を公表した上で、刺された時の対処法説明と予防策としての服装の徹底依頼も行った）や、子どもの成長を発信し続け感じて貰うことで、里山保育に対する保護者の理解は概ね得られると考えられる⁽²⁸⁾。

【表８：今後の不安：単位（人）】

| | |
|---------------------------|---|
| 生き物による怪我 | 9 |
| 熊対策 | 7 |
| バス送迎・保育中の雪によるトラブル | 7 |
| バスでの移動に送迎時間を合わせ続けること | 3 |
| 分園とは異なる小学校の教育環境に子どもが馴染めるか | 2 |
| 放射能の里山環境への影響 | 1 |

第三章 里山保育の映像教材

本章では、記録したはらっぱ保育園の里山保育の活動の中から、教材化する映像についてまとめる。専門的指導者の確保等が保育現場で課題と認識されていることに対して、映像教材では、あえて動植物や遊び方に関する特別な知識を保育者が用いていない場면을対象とした。里山保育においては、確かに動植物（熊・ハチ・マダニ・漆）等の最低限の知識が安全確保上求められる、また、専門的知識や特別なプログラムがあることで活動が広がる。しかし、はじめにで挙げた千葉県の調査においても、専門的指導者の確保を必要と考える園が多い背景は、「保育士自体が自然環境で遊んだ経験の少ない世代へと移行しており、子ども達にどのように働きかけたらよいかわからないことが原因の一つと推察された」とあるように、問題の本質は、専門的知識（人材）の不足ではなく、保育者の体験不足により里山の楽しさを知らないこと、楽しさを知らないために知識獲得の動機に乏しいことである⁽²⁹⁾。本研究では、里山という環境の教育効果と子どもの力を信じる保育者の姿勢、子どもとともに自然を楽しむ・学びたいという意識があれば、充実した活動ができ、その充実感が専門的知識への動機づけになるとの見解から、里山を楽しむ子どもの姿と、安全への配慮以外は子どもの力を信じて待つ保育者の姿から成る映像を教材化した。

因みに、平成24年度撮影した主な映像には、‘くわの実採りと小川超え’（2012年7月9日）‘あけび採りの木登り’‘すすきの森探検’（ともに2012年9月20日）‘木のシーソー遊び’‘木登り’（ともに2012年11月19日）‘尻すべり’（2012年12月17日）がある。どの場面も、遊具や特別なプログラム・知識を用いていない中で、子どもと保育者の楽しそうな様子が伝わり、里山保育への関心を高める効果が期待できるが、まずは、11月の‘木登り’を教材とすることにした。その理由は【写真１】にあるように、9月には順番を守って一人ひとり挑戦していた木登りに、11月は別の木ではあるが、役割分担で協働して挑戦する子どもの成長が見られること、約50分という長時間にわたり、年長児の高い集中力（試行錯誤と工夫）が見られることがある。

以下では、50分にわたる活動の概要を説明する。

【写真1】 9月木の実採り



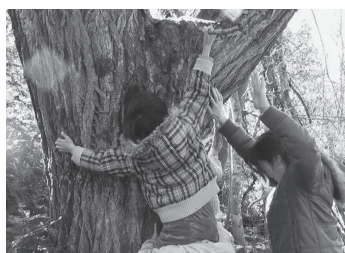
【写真2】 3人の肩車



【写真3】 4人の馬



【写真4】 肩車+棒



【写真5】 登り棒



【写真6】 神輿



【写真7】 梯子の発想起源



【写真8】 梯子作り



【写真9】 梯子作り



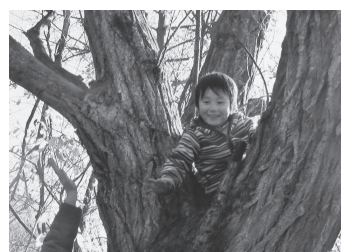
【写真10】 梯子仕上げ



【写真11】 梯子登り



【写真12】 木登り成功



【写真4】で見られるように、大人が手を伸ばしても枝分かれしたところ（地上約2メートル）に届かない木に登るという活動に、年長男児4名と保育士（安全配慮以外は基本的に見守りでアイデアは出さない）が取り組む活動である。

男児らはまず、【写真2】にあるように、3人での肩車で登ろうとする。しかし、2人を持ち上げる一番下の男児が立ち上がることができず、軽い男児が上になるよう順番の入れ替えを数パターン試すが立ち上がれない。次に、【写真3】にあるように、土台になる男児が馬になるという方法を採用。足の2点で支えるより手足の4点で支える方が安定するという発想があり、共有されたのである。しかし、馬でも順番のパターンが数回試されたが、結局、今度は高さが足りないために登れない。

ここで、後に繋がる大きな発想の転換が生まれる。道具の活用である。【写真4】は2人で肩車を組んだ上で、反対側から出された‘枝’を掴んで登る、【写真5】は‘太めの枝’を立てかけて竹登りの要領で登るというものである。反対側からしなっ

て届く太さの‘枝’では男児の体重を支えきれず【写真４】の取組は失敗し、靴下を脱ぐ気になれず（男児らは裸足での竹登りであれば３メートル以上登ることができる）【写真５】の取組も失敗するのだが、周囲の自然物を活用する・見立てるという発想で、男児らの試行錯誤が豊かになっていく。

次に、【写真５】の竹登りが運動会種目であったことから、【写真６】の神輿（運動会で保護者が実施）が試されるのだがうまくいかない中で、暫くすると【写真７】にあるように更なる発想の深化が生まれる。枝と枝を組み合わせて足場を作るというもののだが、これは、複数の道具を組み合わせて活用している。【写真７】の発想を受け、保育士が舐糸を持っていることを告げると、【写真８・９】にあるように、梯子作りが始まる。適当な長さや太さの枝を集める、糸を切断する、糸を結ぶといった工程で、男児らは自分達で役割分担を決定し、進めていく。【写真１０・１１】にあるように、保育士から仕上げや落下防止の援助だけは受けるが、【写真１２】の成功は、男児らの発想と協働によるところが大きいことから、その表情が物語っているように、男児らは十二分に達成感を味わっていた。

以上の活動では、子どもの様子だけでなく、以下のことにも留意したい。まず、幼児の力を信じる保育士の援助姿勢である。上述したように、登れたという成果だけを求めず、５０分にわたり幼児の試行錯誤に寄り添う保育士の援助姿勢は、目立たないが容易には真似できない。また、男児らは当初、この保育士に押し上げて登らせてくれるよう依頼するのだが、保育士も登りたいと表明したことで、保育士を複数の男児で持ち上げようとするが上手くいかず、保育士に頼らずに自分達の力で登る上述の取組を始めており、意欲を引き出すという点でも関わり方の工夫がある。次に、試行錯誤の過程で出される「神輿」「竹登り」のアイデアは、運動会種目として普段の保育で触れていることが活かされていることである。以上の二つのこと（保育者の姿勢と日頃の保育内容）だけでも、幼児を単に雑木林に連れていくだけではこのような発展的・協働的活動は期待できないことは明らかである。したがって、特別な知識やプログラムがなくても、極端な言い方をすれば、ないからこそ充実した活動が展開できることや、子どもの楽しそうな様子を伝えることを主眼に置いた教材映像ではあるが、視聴時には、安易な理解を避ける観点から、保育者の姿勢（子どもを信頼すること等）や日頃の保育との連続性、里山保育の継続性の大切さを合わせて伝えていく必要があるといえる。

おわりに

本研究では、里山保育の普及に向けて、山形県内の里山保育の現状を明らかにし、県内の里山保育実践園の取組や保護者の意識を把握することを目的としていた。

第一章では、山形県内での里山保育実施状況を把握するアンケート調査の結果を整理し、里地里山が散歩圏内にある園にあっても、継続的に里山保育に取り組んでいる園が多いとはいえないことや、未実施園では、場の確保に加えて専門的指導者の確保が求められていることなどを明確にした。

第二章では、はらっぱ保育園の特色と分園での里山保育の概要を整理した上で、保護者を対象にしたアンケート調査の結果をまとめた。安全対策、特に事故や怪我への

対処法への不安が多いが、子どもの成長を実感することで園への総合的な評価は安定する（不安が和らぐ）ことを示した。

第三章では、はらっぱ保育園の里山保育の記録映像から作成した映像教材（発展的木登り）の概要を整理した。映像は、知識がなければ里山保育ができないという消極的な認識を改められるように、里山での幼児の発想の豊かさを十分に示すことができるものであるが、合わせて、専門的な知識以前の保育者の援助姿勢の重要性を伝えられるものとなっている。

次稿以降では、（１）第二章で整理した保護者理解獲得の方向性、第三章で紹介した映像教材と必要な補足説明（保育者の姿勢等）を保育者志望の学生に教授し、その成果と課題を検証すること、（２）山形県内を中心に、里山保育実践園の訪問調査を継続し、注目される保育内容や養成校への要望（保育者に求める資質など）の一層の把握に取り組むこと、（３）専門的な指導者（森林インストラクターやネイチャーゲーム指導者などが考えられる）を活用している事例を調査し、保育内容や運営方法の整理・分析を行うことが、里山保育の普及という本研究の目標に向けて必要と考えている。

本研究は、全国保育士養成協議会東北ブロック平成24年度個人研究助成を受けて進めており、本稿は、成果の一部として平成25年度東北ブロック大会（於：天童ホテル 11月10日）で口頭発表したものの一部に、新たな内容を加えて再構成している。

脚注

- （１）全国的な調査において特に注目されるのは、小学校低学年で学校の授業や行事以外での自然体験活動が顕著に減少していることである。17項目の自然体験に関する4学年（小学2年・5年・中学2年・高校2年）、つまり68指標の5年間比較調査において、全般に減少傾向な中でも10ポイント以上減少している指標が4つあるのだが、「山登りやハイキング、オリエンテーリングやウォークラリー」49.6%⇒38%、「昆虫や水辺の生物を捕まえること」84.5%⇒72.1%、「植物や岩石を観察したりすること」55.5%⇒44.7%は小学2年生のものである。国立青少年振興機構『「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」報告書 平成22年度調査』平成23年、78・79頁。
- （２）ドイツでの研究は、ペーター・ヘフナー著／佐藤竺訳『ドイツの自然・森の幼稚園－就学前教育における正規の幼稚園の代替物』公人社、2009年。スウェーデンでの研究は、グラーン博士の研究：岡部翠『幼児のための環境教育－スウェーデンからの贈りもの「森のムッレ教室」』新評論、2007年、62～79頁。国内でも、森のようちえんの幼児の絵から知能指数を測定して知能面での発達を証明しようとする試み等もある。梅田真樹 他「森の幼稚園の子どもの知能指数」『東大阪大学・東大阪短期大学部 教育研究紀要』第8号、2010年、29～32頁。
- （３）前掲書『「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」報告書 平成22年度調査』46・47頁。

- （４）ヨーロッパに起源を有する森のようちえんは、本格的な形態としては避難施設以外の園舎を持たないものを指すが、広義には一般的な保育園での取組や行事型も含まれる。山形周辺においては、村山市のNPO法人ポポーのひろばや栗駒自然学校での行事型が有名であるが、一般的な保育園・幼稚園での活動をして用いられることもあり、里山保育と本質的な目的や主な活動内容が異なることはないとの認識から、本研究では同義語として扱う。
- （５）社会館保育園の保育内容や理念を紹介するものとしては、斉藤道子『里山っ子が行く』農山漁村文化協会、2009年。洲脇史朗『耕さない教育』吉備人出版、2007年、69～89頁。また、NHK教育『里山保育が子どもを変える』（2007年10月28日放送）もある。
- （６）日本野外生活推進協会HP（<http://www7.ocn.ne.jp/~mulle/>：2013年12月13日最終アクセス）
- （７）森のようちえん全国ネットワークHP（<http://www.morinoyouchien.org/modules/tinyd03/>：2013年12月25日最終アクセス）
- （８）木村仁『創造の森の仲間たち－札幌トモエ幼稚園のファミリー教育－』樹心社、2001年。
- （９）小西貴士「『森の幼稚園』の実践から幼児の発達を考える」『小児科臨床』VOL. 58 No. 4、2005年、581～588頁。
- （10）東京都世田谷区で園舎を有さない保育を行っている‘あおぞらえん’を記録した宮原洋一『カモシカ脚の子どもたち』新評論、2009年。神奈川県藤沢市で自宅周辺地域での保育を行っている‘つくしんぼ’を記録した福永雪子『泥んこで風とあそび街を歩く』教育資料出版会、2000年。神奈川県鎌倉市で保護者も加わって1歳児から野外保育を行っている‘青空保育なかよし会’を記録した『土の子育て』コモンズ、1997年。など、興味深い記録がある。
- （11）千葉県内において里山保育を実施していない園の内、実施を希望する園の実施に向けた条件は、里山整備71%、指導者派遣51%、プログラム提供41%であり、また実施を希望しない園の理由では、安全確保が困難93%、保護者の同意が得にくい29%、保育士の不足29%であった。総谷珠美他「里山における幼児教育がもたらす森林セラピー効果－里山保育の実施状況と課題－」『関東森林研究』No.58、2007年、80～82頁。
- （12）里山保育には一定の継続性と頻度が重要であり、行政・地域住民の協力や都市部の園による分園開設・里山保育実践園との提携等の工夫が見られる。行政の取組としては、里山整備に子どもが関与するどんぐり銀行の取組が興味深い。大塚菜生『どんぐり銀行は森の中』国土社、2010年。また、地域住民の協力としては、近隣の保育園に森を提供している林業家の取組などが注目される。岡本理子「幼児期における自然体験の環境教育的意義の一考察－秋田・森の保育園の事例から－」『桜美林論考』（１）、2010年、39～48頁。
- （13）行政が指導者を派遣する取組としては、里山保育のモデル園を指定し、キャンプインストラクターや森林インストラクターを派遣している山形県村山総合支庁森林整備課の『村山版森のようちえん』事業などがある。本研究に協力頂いているはらっぱ保育園は、平成24・25年度のモデル園である。
- （14）山形県学校名鑑（<http://www.pref.yamagata.jp/ou/kyoiku/700001/gakkomeikan>）

html：2013年1月13日最終アクセス）に掲載されている幼稚園109園、山形県子育て推進部子育て支援課HPの認可保育所一覧（<https://www.pref.yamagata.jp/kenfuku/kosodate/hoiku/7010001ninkahoikujyo.html>：2013年1月13日最終アクセス）に掲載されている保育所236園に発送したが、閉園等で5園分が戻り、合計340園である。

- (15) 環境省HP（<http://www.env.go.jp/nature/satoyama/top.html>：2012年12月20日最終アクセス）
- (16) 回答を得た161園の内、8園が当該項目無回答である。ただし、内4園では実施形態には回答していることから、里山保育を1回以上は実施している。
- (17) 里山保育を実施している113園（【表2】の1回以上109園と実施頻度は無回答だが実施している4園）の複数回答である。
- (18) 園庭の環境で代替可能とした2園と当該項目以下の整合性を欠く1園、未満児しか在園しない4園を除いている。
- (19) M園では裏山にツリーハウスを設置する、畑を整備する等、保護者の協力を得て環境を整えているが、里山保育を必ずしも肯定的には受け止めていなかった親もあり、保育参加で尻すべりなどを体験することで、表情が大きく変わると園長は感じている。また、保護者理解獲得のために、保育の様子をDVDに収録し、有料で保護者に配布している。（2013年6月21日に下村と村上が訪問してインタビュー調査を行った。）
- (20) K園でも、上記M園同様、保育参加とそこでの自然体験活動を通して保護者理解の獲得に努めている。園だよりの掲載写真数が多いことも特徴的である。（2013年6月27日に下村が訪問してインタビュー調査を行った。）
- (21) S園では、保護者への情報発信手段として有志の保護者が基本的なシステムを構築したHPを活用している。HP用に写真を撮られ慣れている子どもたちは、筆者のカメラも殆ど意識しなかった。（2013年4月22日に下村と佐東が訪問してインタビュー調査を行った。）
- (22) 保護者アンケートを行った後になるが、平成25年度から主食を無農薬玄米にするとともに、調理師に見守られながら、保護者のために年長児一人だけで行う味噌汁作りなどにも取り組んでいる。
- (23) さくらんぼ保育園（埼玉県深谷市）の記録映画：山崎定人監督『さくらんぼ坊や』は保護者向け研修会でも上映されている。なお、リズム活動に関しては、身体機能の発達を促す観点以外にも、判断力育成を図る目的で取り組んでいる里山保育実践園がある。斉藤道子『里山っ子が行く』農山漁村文化協会、2009年、151頁。
- (24) 山形県では、村山総合支庁地域振興課が「村山地区内の（知名度の高い名山及び標高1000m以上の高地を除く）山から、山麓、集落、河川、田畑、森林公園的なものまでを、広い意味での‘里山’と捉え、所在とその楽しみ方などについて」紹介する『里山ガイドマップ』を作成しており、県内38、山形市内4の里山を掲載している。西蔵王は“遊ぶ・体験”の里山として紹介されている。（<http://www.pref.yamagata.jp/ou/sogoshicho/murayama/301003/satoyama/index1.html>：2012年12月1日最終アクセス）
- (25) アンケート実施が年度を跨ぐため、新規入園や転園があり、実施前と実施中の

アンケート対象者は同じではないが、入れ替わりは若干名である。

- (26) 里山保育に対する保護者の感想としては、例えば、木更津社会館保育園の保護者のものがある。『ふたば』№73、財団法人母子健康協会、2009年。（<http://www.glico.co.jp/boshi/futaba/no73/index.htm>：2013年12月20日最終アクセス）
- (27) 筆者が平成25年11月に開催された山形市保育園保護者会連絡協議会に参加した際、はらっぱ保育園での里山保育実施は他園の保護者に殆ど認知されていなかった。
- (28) ‘概ね’とことわりを入れるのは、3人とも子どもは分園を楽しみにしていると感じており、内2名は分園での保育参加（1日保育者）経験もある保護者が、子どもの成長の主要因が里山保育とは感じていないからである。2名は総合評価で満足を選択しており、一貫性を欠く（満足の対象は子どもの成長の筈だから）回答と扱うべきかもしれないが、子どもの成長は数値化が難しい中で、保護者に実感して貰うことの困難さを表すものと受け止めている。
- (29) 第一章で挙げた里山保育に取り組んでいるS園の園長も、保育者志望者には、知識よりも自然体験や体験を通して感性を磨くことを求めている。

【参考資料１：里山保育実施状況アンケート質問項目】

<分類> ①幼稚園 ②保育所 ③認定子ども園

<園児数> ①100人以上 ②99～50人 ③49～21人 ④20人以下

<所在地A> ①庄内地方 ②最上地方 ③村山地方 ④置賜地方

<所在地B>里地・里山が園の周辺（通常保育活動の散歩経路の範囲）に
①ある ②ない

〔補足説明〕本アンケートでの里地・里山とは、原生的な自然と都市との中間に位置し、集落とそれを取り巻く二次林、それらと混在する農地・ため池・草原などで構成される地域とします。したがって、以下の質問では、‘収穫を主とする芋ほり’のような農地のみでの自然体験等は、里山保育に含めないで下さい。

【1】里地里山での保育の実施状況について

（１）年間の実施回数（平成24年度：年長児が含まれるクラス）

①100回以上 ②99～50回 ③49～20回 ④19～5回 ⑤4～1回 ⑥0回

（１－２）（１）で⑥0回を選択された園に実施されていない理由を伺います。（複数回答可）回答後は（５）へ

- ① 園周辺に実施できる環境がない・移動手段がない。
② 里山での怪我・事故が心配。
③ 里山保育を進められる知識等がある職員がいない。
④ 保育者の人数が足りない。
⑤ 時間が確保できない。（他の保育内容に力を入れている）
⑥ 保護者の理解が得られない。
⑦ 里山保育を良い保育だと思わない。
⑧ その他（ ）

（１－３）（１）で、①～⑤の1回以上を選択された園に実施による効果を伺います。

※アンケート記載者の印象でお答えいただいて結構です（複数回答可）

- ① 幼児の探究心（自然や食への関心を含む）が深まった。
- ② 幼児の体力・運動能力が向上した。
- ③ 幼児が遊具やおもちゃに頼らず工夫して遊ぶようになった。
- ④ 幼児の情緒が安定した。（開放感を感じていた）
- ⑤ 幼児同士のコミュニケーションや思いやりが深まった。
- ⑥ 幼児と保護者の会話が増えた。
- ⑦ 保育者が生き生きとした。
- ⑧ 上記の選択肢のような幼児の成長は見られるが、里山保育が主な要因とは感じていない。

⑨ その他（ ）

（2）実施形態（複数回答可）

- ① 通常の保育活動の散歩の中で実施している。
- ② 里地里山に分園を設けている。
- ③ 自然豊かな公園（県民の森・ほとりあ等）に徒歩以外の手段で移動して実施している。
- ④ 里地里山にあり提携している園を徒歩以外の手段で訪問し、幼児が交流しながら実施している。

⑤ その他（ ）

（3）実施場所（複数回答可）

- ① 県民の森・野草園などの森林公園
- ② 公園以外の森林
- ③ 雑木林（寺社林を含む）
- ④ 河川敷・池や沼周辺
- ⑤ 海辺
- ⑥ その他（ ）

（4）活動内容（複数回答可）

- ① 生き物（植物や昆虫・ザリガニ等）の採集
- ② 水遊び・泥遊び・雪遊び
- ③ 樹木を活用した遊び（木登り・ロープブランコ等）
- ④ 歩くことを中心とした山登り
- ⑤ 自然に生っている木の実や果樹・きのこなどの収穫
- ⑥ 鬼ごっこ・かくれんぼ等の遊び
- ⑦ その他（ ）

（5）25年度の里山保育への意向

- ①増やしたい ②24年度と同じ位を継続 ③減らしたい ④実施しない

【2】里地里山での保育の実施・充実に向けて

（1）充実に向けて（これまで未実施の場合、実施するために）必要な条件

（複数回答可）

- ① 園の周辺の里地・里山の整備、もしくは里地・里山への移動手段の確保
- ② 保護者の理解

- ③ 保育者の意識改革や知識の獲得
- ④ 専門的な指導者の確保
- ⑤ 保育者の増員
- ⑥ 特にない
- ⑦ 条件に関わらず実施しない（他の保育内容に力を入れたい）
- ⑧ その他（ ）

（２）（１）で④専門的な指導者を選択された園に伺います。求めている指導内容は
何ですか。（複数回答可）

- ① 自然を活用した遊び方
- ② 自然に関する知識（危険な動植物・昆虫の知識やその回避方法など）
- ③ 怪我・かぶれ等の応急処置
- ④ その他（ ）

【３】自由記述

【参考資料２：里山保育実施前の保護者アンケート質問項目】

【回答者について】該当するものを丸で囲んで下さい。

- （１）父親 母親 祖父母 その他（ ）
- （２）10代 20代 30代 40代 50代 60代～
- （３）送迎時間（片道） 20分未満 20分以上
- （４）これまでに保育参加された経験 ない １回 ２回以上
- （５）里山保育の実施に関する説明会に参加されましたか はい いいえ
- （６）里山保育に関する映像（保護者研修会で上映された映画やNHKで放映されたドキュメンタリー等）や書籍（『里山っ子が行く』等）をご覧になったことがありますか。
ある ・ ない

【入所動機・満足度】該当するものを丸で囲んで下さい。

- （１）お子様の性別 男児 女児
- （２）はらっぱ保育園の入園希望順位は１位ですか はい いいえ
- （３）はらっぱ保育園を選択された理由（当てはまるもの全て）
- ① 理由は特に無く、家や職場から利用できる範囲の保育所だったから
- ※ ①を選択された場合のみ、他の選択肢は選ばないで下さい。
- ② 食育への取組に魅力を感じたから
- ③ 散歩を多く取り入れた保育に魅力を感じたから
- ④ リズム活動を多く取り入れた保育に魅力を感じたから
- ⑤ 併設の高齢者施設との交流に魅力を感じたから
- ⑥ 保育者（園長・保育士・事務職員）の人柄に惹かれたから
- ⑦ 小規模で家庭的な雰囲気（先生と呼ばないこと等）に魅力を感じたから
- ⑧ その他（ ）
- （４）入園してからこれまでの満足度

大いに賛成 賛成 どちらでもない かなり反対 反対 里山保育についてよく分からない

⑦ その他 ()

(1) ①父親 ②母親 ③祖父母 ④その他 ()

- (2) ①10代 ②20代 ③30代 ④40代 ⑤50代 ⑥60代～
(3) これまでに保育参加された経験 ①ない ②1回 ③2回以上
(4) 分園で保育参加された経験 ①ない ②1回 ③2回以上
(5) 園長主催の家づくり活動に参加 ①している ②していない
(6) お子様の性別 ①男児 ②女児
(7) 送迎バスを利用できず、ご家族が分園まで送迎された経験
①ある ②ない

【2：今年度の里山保育の評価】

(1) 現在の総合的なお気持ち

- ①大いに満足 ②満足 ③どちらでもない ④不満 ⑤かなり不満

(2) お子様の分園への気持ち

- ①非常に楽しみにしている ②楽しみにしている ③どちらともいえない
④とても嫌がっている ⑤嫌がっている ⑥よくわからない

(3) 里山保育の効果として感じたこと（当てはまるもの全て）

- ① 体力・運動能力が向上した。
② 物事に取り組む上での意欲や集中力が向上した。
③ 自然（動植物）への関心が深まった。
④ 友達とのコミュニケーションが深まった。
⑤ イライラすることが少なくなった。（情緒が安定した、落ち着きが増した）
⑥ 園でのことを家庭で話すことが増えた。
⑦ 園の雰囲気（保育者の表情など）が以前よりも活気があるようになった。
⑧ 上記の選択肢のような幼児の成長は見られるが、里山保育が主な要因とは感じていない。
⑨ その他（ ）

(4) 不満に感じたこと（当てはまるもの全て）

- ① マダニ等の生き物による怪我（及び、それへの対応）
② 転落や転倒など子どもの行動による怪我（及び、それへの対応）
③ 衣服の汚れ等、洗い物が増えたこと
④ バスによる分園への移動に送迎時間を合わせられず、保護者が送迎したこと
⑤ 特に無い
⑥ その他（ ）

(5) 今後に不安を感じていること（当てはまるもの全て）

- ① 生き物による怪我
② 子どもの行動による怪我
③ 熊対策
④ バス送迎・保育中の雪によるトラブル
⑤ バスでの移動に送迎時間を合わせ続けること
⑥ 放射能の里山環境への影響
⑦ 分園とは異なる小学校の教育環境に子どもが馴染めるか
⑧ 特に無い
⑨ その他（ ）

(6) 要望 (当てはまるもの全て)

- ① 里山保育に関する保護者向け研修会(映画上映等も含む)を開催して欲しい。
- ② はらっぱ保育園の保育者以外の専門職(例:NPO法人はらっぱ塾の八木氏:森のようちえん事業で県民の森を訪問した際などの指導者)が関わる機会を増やして欲しい。
- ③ 特に無い
- ④ その他 ()

【自由記述】